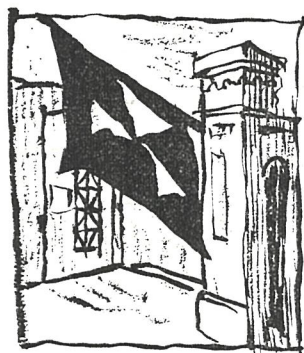




私の学生時代

柔道部の生活

太田道伸

私が同志社を出たのは昭和十一年の春のことであるから、すでに二十七年にもなる。齢五十を越え胡麻塩頭になった昨今では同志社六年の思い出も大変懐かしいが、また遠い昔の夢のような気もする。私は元来が京都市生まれで、生家は石庭で有名な龍安寺の門前である。しかも同志社を出て今の東京の職場につくまでは、ほとんど京都の地を離れて暮したことのない生え抜きの京都産なのである。したがって小学、中学、同志社といずれの場合も自宅よりの通学で、電車でよりもむしろ自転車通いの方が多かった。しかし学校通いだけは熱心で、それこそ雨の日も風の日もほとんど休んだことはなく、これを卒業までずっと続け通した根気だけは、われながら感心している。私はよくいえば、箱入息子の環境での学生時代を過ごしたので世情には全く疎く、性格的にも生硬な傾向が強く、先輩や同僚にも多分に迷惑をお掛けしたことを思っている。

かような次第で、私の学生生活の思い出についても採り立ててこ

披露できるようなことは何もないわけで、文字通り平々凡々の通学学生の典型といった格好で、無為にして六年間を過ごしたことが恥かしいくらいである。もちろん、勉学に努めたわけでもなく柔道部にお世話になっても生来の不器用さもあって、強くもうまくもなれなかった。しかしながら極めて話題に乏しい私の学生生活中では、なんといっても六年間の柔道部員生活の印象が未だに最大の思い出として残っている。入部については木下、上田先輩等が熱心に勧められ、気乗薄のまま籍を置かして貰っていたが、二年、三年と時が経つにつれ、温かい部の雰囲気はこちらが融け込まされ、遂に卒業するまでお世話になりとおした次第である。

この部員生活の体験が今日においても、なおいろいろな意味で大変有益であり、有難かったと感謝している。当時の柔道部は部内の雰囲気が親愛と融和に充ち溢れていたとでもいうのか、真に血の通い合った温かさが部員相互の心の中に通じ合っていた感じであった。柔道部長には当時学生主事をやつおられた藤田先生や生島先生がおられ、師範には斯界の重鎮田畑先生をいただき、また先輩部員には柔道も強くやさしい兄貴でもあった木下、金岡、石田、上田、永谷等の諸兄がおられ、先生も先輩も、穏やかで、優しく、強い立派な人々許りであったので、後輩の私どもは日々安心し切って親切的指導を受けることができた。

かようなわけで入部当初の気乗薄は先生や先輩によって醸し出されていた雰囲気につきかり同化され、逃げ出すどころか逆に虜になつてしまつたのであった。そして入部したお陰で大阪の住友や東京の立教との試合にはもちろん、遠くは四国、台湾、上海方面までも

遠征に参加させて貰い、また夏季には淡路の洲本や、若狭の小浜での合宿練習にも加わり得たことは、当時の私の最大の喜びであったとともに、今だに折にふれ、懐しい思い出に浸ることができる。

私の柔道部員生活の効用は、遠征や合宿の思い出に止まらず、次のような点において真に大きなものがあつたと信じている。

すなわちその一つは、それまで家庭と学校くらいしか知らなかつた全くの世間知らずの私が、入部のお陰で追々と外界に対する視野を広めるとともに、実社会の様子についても何がしかの予備知識を持ち得たことは幸であつた。わけても最初に飛込んだこの社会で、温かい師弟の關係や友情の雰囲気の中で、協同生活の體驗を得、人間關係の麗わしい姿とその大切な所以を掴み得たことは一層有難かつた。

このことは、私が卒業直後経験した長い厳しい軍隊生活においても、また敗戦直後の混乱した職場秩序の中においても、部下や従業員を含む人間關係の指導改善に大いに役立つたと信ずるからである。今一つの効用は、肉体的な練磨を通して徐々に身についた粘ばりと土性骨のことである。至らぬ私ごときものにとつては、單なる訓示や精神修養論だけでは、到底確かりした根性とか忍耐などといふものが身に付くはずがない。矢張り、時には苦しいほどの心身両面の鍛練の経験こそが、この点で私に効果を齎してくれたものと感謝している。以上平凡な私の学生生活において、いささか印象に残つていた柔道部員生活についての若干の思い出や感想を取り止めるもなく申し述べたが、これをもって私の拙文のご要請に対する責を

免じていただくこととしたい。

終りに、日ごろ私が同志社に対して相済まない気持ちでいながら、未だにそれを果し得ていない母校へのご無沙汰お詫びを申し添えさせていただきたい。冒頭に述べたごとく、私は卒業後二十七年にもなるのに、またことに京都出身であるにも拘らず、絶えて久しいご無沙汰をして来たことは、たとえ職場事情が如何様にもあれ、誠に申し訳なく、学校に対しても柔道部に対してもここに深くお詫び申し上げる次第である。

私にとって、時折り同志社の状況を知り得るようですが、在京の昭和十一年前後の卒業生仲間のお蔭である。これらの皆様とはおよそ年に一、二度相集つて小宴を張り、十数名が賑々しく母校の昔話に耽つたり、現況を知らせたり、あるいは各自の職場近況を語り合つたりする程度である。私のご無沙汰の実情はかような有様であるので、このままで放置しておいたのではいよいよ母校のしきいが高くなつて遂には近づけなくなつてしまうので、今年こそは出張等の機会を活用してなんとか学校にも立寄り、発展の現況をつぶさに見せていただくとともに、私どもの在学当時以來、引続いてご在職の諸先生方にもお目にかかり、沁々お詫を申し上げたいと思つてゐる。

(昭二一・大経・小田急常務取締役)